

コミュニケーション力と出会い・ 交際間にまつわる研究

佐藤 晴彦

はじめに

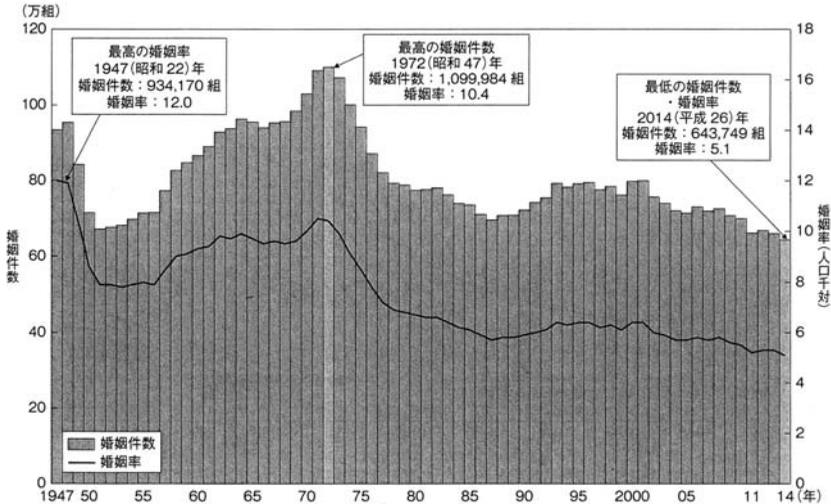
1. コミュニケーション力等と結婚意欲との関係—白書・調査データより検証—
 - 1-1 独身者の結婚意欲の高さ
 - 1-2 交際のきっかけ
2. 出会い・交際に係わるコミュニケーションの考察
 - 2-1 コミュニケーション力と交際
 - 2-2 コミュニケーションのタイプとその形成期
 - 2-3 コミュニケーション力アップによる交際・結婚への影響
3. 属性ごとのコミュニケーション不足の状況把握とそれへの対応
 - 3-1 属性ごとのコミュニケーション不足の状況把握
 - 3-2 コミュニケーション不足への対応

結論

はじめに

わが国の近年の出生率の推移を内閣府（2016、第1-1-1図）で見ると、総じて減少傾向を示している¹⁾。この少子化傾向はわが国の社会に深刻な影響を及ぼしている。例えば、少子・高齢化²⁾による現役世代負担の増大、労働力人口の減少、過疎化・高齢化に伴う地域社会の変容、労働力人口の年齢構成の変化、家族機能の変化、人口の減少、経済成長率低下の可能性、子どもの健全な成長への妨

図1 婚姻件数及び結婚率の年次推移



資料：厚生労働省「人口動態統計」内閣府（2016）第1-1-4図引用。

げ等である。

少子化傾向の要因を、結婚前、結婚後³⁾に分けると、前者の結婚率低下の方が少子化に大きな影響を及ぼしている。（結婚率低下の裏を返せば未婚率の上昇となる《参考図表1, 2》）。

婚姻件数を見ると、第一次ベビーブーム世代が25歳前後の年齢を迎えた1970年から1974年にかけて婚姻率（人口千人当たりの婚姻数）は概ね10.0以上であったが、その後低下傾向を示している。1987年に最低記録を示してから一時増加傾向を示したものの、2014年には5.1と過去最低を示す（図1）に至っている。

【今後、着目点となる結婚率】

このような少子化傾向に対して、本研究は、佐藤（2016）につづき、「出産意図を持つ」以前のライフ・ステージを考察する。

近年、婚姻率に減少傾向が見られたが、特に男性では25～29歳、女性では20～24歳の年齢層で大きく減少していることが、全体の引き下げ傾向の主因になっている。結婚形態、すなわち、恋愛結婚と見合い結婚（見合い結婚は「見合結婚」

と「結婚相談所」で知り合った場合の合計とする) から、婚姻率の推移を見ると恋愛結婚と見合い結婚の構成比は大きく転換している(参考図表3)。見合い結婚に代わって、この恋愛結婚割合が上昇している。そして、結婚率減少に影響を与えている。

【出会い・交際・結婚とそのきっかけ、コミュニケーション力について】

この状況から、本研究では結婚前のライフ・ステージにおけるコミュニケーション力と出会い・交際に焦点を当てた分析を行う。コミュニケーション力は、結婚率に大きく関わる出会いや交際のきっかけと、どう関係しているのかについての研究である。その状況を把握した上で、属性(年齢、職種、収入、家族規模、兄弟姉妹数)ごとに対策を立てることができるのかどうかを検討する。

【「結婚像とコミュニケーション力の関係」という研究に至った経緯】

筆者は少子化問題を結婚後の研究として、夫婦が出産意図(参考図表4に挙げたように8+社会的支援《=9要因》があるとした)を現実的には持てないような状況が多くある中で、それに対する支援がある場合、果たして夫婦は出産意図を持つことになるのかどうか。また、支援の方向性を効果的にするため有効性のある支援策を検証した⁴⁾(佐藤、2012, 2013)。

その後2012から2014年度交付の科研費研究では、夫・妻が抱える精神的・肉体的負担が出生数に及ぼす影響について、実証的に分析した結果、35から39歳で子供が1人目の場合不安・ストレスが非常に大きいことを報告した⁵⁾。

佐藤(2013, 2016)では、出産意図に関わる要因⁶⁾に対する政府支援(12施策)が効果的なのかを検証した。その結果、主な施策の1つ1つは妥当であり首肯される。しかし、全体の12施策はアンバランスなものとなっていた(参考図表5)。

これを3つの期間からなるライフ・ステージからみると、「子どもを生む時期」の支援、「子育て時期」の支援には政府は力を入れているが、「出産意図を持つべき時期」以前への支援は極めて手薄であることが分かった(佐藤, 2016)(参考図表6(1)(2))。

以上が本テーマに至った経緯である。

【本テーマの動向と位置づけ】

欧米諸国では、交際相手をつくろうとする場合、コミュニケーション力をあえて問題にしない。なぜなら、相手を感じや雰囲気判断せず(「以心伝心」等はな

い)、身振り手振りを交えたコミュニケーションを通して交際相手をつくろうとする習慣があるからである。従って、欧米においてコミュニケーション力と出会い・交際間にまつわる研究を見出すことは難しい。

国内研究における本テーマの位置づけについて、民間の結婚仲介業やサイトでは、コミュニケーション能力が出会い・交際のきっかけにいかにも有効かを熟知しており、その方法を講座という形で提供している。

例えば、ホームページ「恋愛関係の統計データから読み解く社会問題」「恋愛コミュニケーション力向上と少子化対策」では、恋愛力、異性間のコミュニケーション能力が少子化という大きな社会問題と関わっている事を指摘し(少子化は現役世代負担の増大、労働力人口の減少、過疎化・高齢化に伴う地域社会の変容等を引き起こしている)、今は見合いではなく恋愛の時代である(参考図表3)が、うまくコミュニケーションがとれず(魅力を伝えることができず)交際に至っていないケースが多いこと、恋愛を成功に導くためにはコミュニケーション能力が非常に重要であることをうたっている。

また、晩婚化が進む今日、年齢が上がるに従って、恋愛結婚が難しくなっている。コミュニケーション能力を高める必要性があり、その事によって可能性は出てくる。そのため、その方法は提供できるとしている。

これにまつわる最先端の学術的研究は、結婚とその属性から未婚・結婚の原因を探ろうとしたもの(永井,2016、永井・久木,2016、中西,2016、原田,2016)である。この場合の属性は、配偶状態別、性別、年齢別、有業・無業、正規・非正規社員別、持ち家率、家計収支(住居費、消費支出、入貯蓄高、負債保有率、住宅・土地のための負債保有率や現在高)などを挙げている。

しかし、結婚率との関係を考察する場合、就業、収入、持ち家率も大きな要因ではあるが、これらの要因内容を上昇させることが、直ちに結婚率を上げることになるとは思えない。

本研究は、男女が会おうきっかけとその後の交際は、コミュニケーション能力を高めることによって、結婚率を増加させると仮定し、その関係を属性ごとに上昇させるにはどうすべきかその方法を研究する。

1. コミュニケーション力等と結婚意欲との関係

一白書・調査データより検証一

上記から、独身者が結婚できないでいる理由はコミュニケーション力に不足があることにも関係していると思われる。コミュニケーション力の不足分が、未婚率上昇に影響していることをデータより確認する。

1-1 独身者の結婚意欲の高さ

(1) 男女・年齢階級別結婚意欲

国立社会保障・人口問題研究所編集（2014）によると⁷⁾、いずれは結婚しようと考えている割合は、男女ともに依然として高い水準にある（表1）。「いずれ結婚するつもり」「一生の結婚するつもりはない」（18～34歳対象、2者択一）のアンケート調査結果について、前者の「いずれ結婚するつもり」はどの年度も高水準を示している。ただ、1987～2010年まで、ほぼ5年ごとのこの調査結果の推移では、男女とも90%強から90%弱へと低下傾向にあり、「一生の結婚するつもりはない」はやや増加傾向を示した。

この傾向（「いずれ結婚するつもり」が調査年度ごとにほぼ低下傾向にあること）を如実に表しているのが、男女、年齢別（18～19歳、20～24歳、25～29歳、

表1 調査別にみた、未婚者の生涯の結婚意思

生涯の結婚意思		第9回調査 (1987年)	第10回 (1992年)	第11回 (1997年)	第12回 (2002年)	第13回 (2005年)	第14回 (2010年)
【男 性】	いずれ結婚するつもり	91.8%	90.0	85.9	87.0	87.0	86.3
	一生結婚するつもりはない	4.5	4.9	6.3	5.4	7.1	9.4
	不詳	3.7	5.1	7.8	7.7	5.9	4.3
	総数（18～34歳） （集計客体数）	100.0% (3,299)	100.0 (4,215)	100.0 (3,982)	100.0 (3,897)	100.0 (3,139)	100.0 (3,667)
【女 性】	いずれ結婚するつもり	92.9%	90.2	89.1	88.3	90.0	89.4
	一生結婚するつもりはない	4.6	5.2	4.9	5.0	5.6	6.8
	不詳	2.5	4.6	6.0	6.7	4.3	3.8
	総数（18～34歳） （集計客体数）	100.0% (2,605)	100.0 (3,647)	100.0 (3,612)	100.0 (3,494)	100.0 (3,064)	100.0 (3,406)

出所) 国立社会保障・人口問題研究所編集（2014）表1-1引用。

表2 調査・年齢階級別にみた「いずれ結婚するつもり」と回答した未婚者の割合

年 齢	男 性							女 性						
	第8回調査 (1982年)	第9回調査 (1987年)	第10回 (1992年)	第11回 (1997年)	第12回 (2002年)	第13回 (2005年)	第14回 (2010年)	第8回調査 (1982年)	第9回調査 (1987年)	第10回 (1992年)	第11回 (1997年)	第12回 (2002年)	第13回 (2005年)	第14回 (2010年)
18～19歳	96.0%	90.0	87.5	85.5	88.4	88.4	84.1	95.5%	93.5	88.8	87.6	85.8	89.5	89.4
20～24歳	97.1	92.6	90.9	86.7	88.3	87.7	88.0	97.5	95.1	92.0	90.7	90.9	91.5	91.4
25～29歳	95.8	93.9	92.0	87.1	86.3	88.0	88.2	92.5	91.8	89.9	87.1	87.7	91.8	89.3
30～34歳	92.4	86.9	87.0	80.9	83.8	83.7	81.9	72.7	75.6	83.8	88.7	85.1	84.3	84.9
35～39歳	—	—	80.5	80.1	81.1	81.8	76.0	—	—	63.0	69.1	76.8	73.3	74.2
40～44歳	—	—	66.7	71.4	74.1	70.0	71.2	—	—	42.9	46.7	52.9	57.8	60.7
45～49歳	—	—	50.0	51.4	63.4	53.6	58.0	—	—	27.8	36.4	38.1	45.6	45.1
総数(18～34歳)	95.9%	91.8	90.0	85.9	87.0	87.0	86.3	94.2%	92.9	90.2	89.1	88.3	90.0	89.4
総数(18～49歳)	95.9%	91.8	87.6	83.5	84.8	83.8	82.0	94.2%	92.9	86.6	86.0	85.2	86.1	84.3

出所) 国立社会保障・人口問題研究所編集 (2014) 表1-2引用。

30～34歳) 推移のうち、男性30～34歳の割合である(表2)。

その裏の意味の「一生の結婚するつもりはない」は、男性30～34歳、女性30～34歳に(それまでの年齢層別にみた「いずれ結婚するつもり」の低下傾向を)集積した結果となって表われている(参考図表7)。

次に、ある年齢までは結婚するつもりなのかを訊いた結果を見てみよう。

「いずれ結婚するつもり」と思っている未婚男女に「ある程度の年齢までは結婚するつもり」なのか「理想の相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない」のかについての調査結果は、調査年度によって違いがあるが、どちらも半々前後である。「理想の相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない」はほぼ4割以上を占めている。(参考図表8、国立社会保障・人口問題研究所編集(2014)図1-1参照)。

(2) 所得・就業別結婚意欲

未婚者の結婚意欲を就業状況別にみると(表3)、男女とも正規職員が高く、学生がそれに続いている。前者の場合、調査回数ごとに男女とも60%台から40%台まで減少している。後者は男性では20%台を示し、女性では10%台半ばから20%台強へと増加している。

(3) 交際状況別結婚意欲

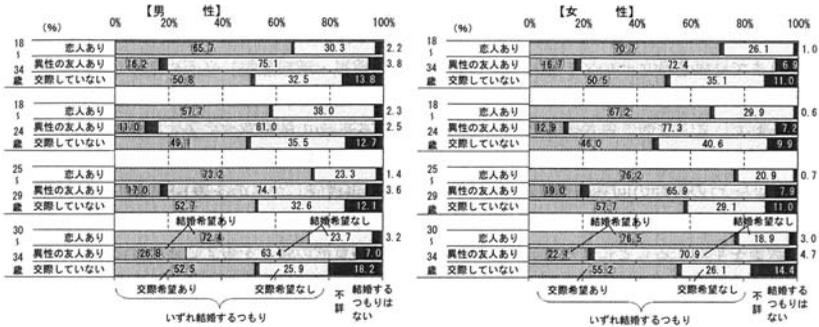
恋人や異性の交際相手がいる場合、年齢の上昇とともに結婚意思が高くなり、結婚を希望する割合が高くなることは当然のことである。一方、交際していない場合、「結婚希望あり」とその逆の「結婚するつもりはない」は共に年齢階級が

表3 調査・就業別に見た、標本構成

就業の状況 (従業上の地位)	【 男 性 】							【 女 性 】						
	第8回調査 (1982年)	第9回調査 (1987年)	第10回調査 (1992年)	第11回調査 (1997年)	第12回調査 (2002年)	第13回調査 (2006年)	第14回調査 (2010年)	第8回調査 (1982年)	第9回調査 (1987年)	第10回調査 (1992年)	第11回調査 (1997年)	第12回調査 (2002年)	第13回調査 (2006年)	第14回調査 (2010年)
正規の職員	63.7%	62.7	61.7	57.7	45.2	47.9	45.7	66.4%	65.6	66.1	54.4	44.5	40.8	41.4
パート・アルバイト	2.4	2.1	2.1	7.7	10.9	10.5	8.9	3.7	3.9	4.5	14.1	16.3	13.5	14.7
派遣・嘱託(・契約)	-	-	-	-	1.9	6.3	5.5	-	-	-	-	4.8	10.6	8.1
自営・家族従業等	8.5	7.4	3.7	5.8	5.5	5.6	4.5	2.7	2.5	1.1	2.3	2.5	1.6	1.8
無職・家事	3.2	2.7	2.3	3.3	7.0	6.4	8.5	9.7	7.1	5.3	5.7	8.1	6.8	7.6
学生	21.2	23.6	28.7	21.0	23.3	20.5	22.3	16.0	19.7	21.8	20.4	18.7	24.3	22.4
その他	0.0	0.3	0.5	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.4	1.1	0.0	0.0	0.0
不詳	1.1	1.2	0.9	3.2	6.2	2.8	4.7	1.5	0.7	0.8	1.9	5.1	2.3	4.0
総数 (18~34歳) (集計集体数)	100.0% (2,732)	100.0 (3,299)	100.0 (4,215)	100.0 (3,982)	100.0 (3,897)	100.0 (3,139)	100.0 (3,667)	100.0% (2,110)	100.0 (2,605)	100.0 (3,647)	100.0 (3,612)	100.0 (3,494)	100.0 (3,064)	100.0 (3,406)

出所) 国立社会保障・人口問題研究所編集 (2014) 表1-7引用。

図2 年齢・交際の状況別に見た、未婚者の生涯の結婚意思



注: 対象は18~34歳の未婚者。「いずれ結婚するつもり」と回答した者について、異性と交際の状況が「1. 交際している異性はいない」(交際希望なし)と回答している場合は、交際の希望「1. 交際を望んでいる」(交際希望あり)、「2. とくに異性と交際を望んでいない」(交際希望なし)の構成割合で分け、「2. 友人と交際している異性がいる」と「3. 恋人として交際している異性がいる」と回答した場合は結婚の希望「1. 結婚したいと思っている」(結婚希望あり)、「2. とくに結婚は考えていない」(結婚希望なし)の構成割合を示している。横棒グラフの水玉は「交際/結婚希望あり」を、灰色は「交際/結婚希望なし」を示している。

出所) 国立社会保障・人口問題研究所編集 (2014) 図1-4引用。

高くなるにつれて微増している。そしてこの微増の代わりに、他の選択肢「交際希望なし」が微減する結果となっている (図2)。

前述のように、定職についている男性の結婚意欲は高い (国立社会保障・人口問題研究所編集, 2014)。しかし、「交際していない人」は年齢が25歳以上、調査ごとに高くなっている。表4は交際している人がいるかないかを訊いた調査である。「交際している異性はいない割合」が調査ごとに増加しているのだ。(「恋人として交際している人」の割合は男性が20%強を女性は30%強を一定に保っているが、《恋人ではなく》友人として交際している異性がある割合は減少傾向にあり、その差が増加と考えられる)。

表4 調査別にみた、未婚者の異性ととの交際の状況

異性ととの交際 交際相手との結婚希望/交際の希望	【 男 性 】						【 女 性 】					
	第9回調査 (1987年)	第10回 (1992年)	第11回 (1997年)	第12回 (2002年)	第13回 (2005年)	第14回 (2010年)	第9回調査 (1987年)	第10回 (1992年)	第11回 (1997年)	第12回 (2002年)	第13回 (2005年)	第14回 (2010年)
婚約者がある	2.9%	3.2	2.9	2.7	2.9	1.8	4.6%	3.9	3.8	3.9	4.8	3.1
恋人として交際している異性がある	19.4	23.1	23.3	22.4	24.3	22.8	26.2	31.6	31.6	33.1	31.9	30.9
結婚したいと思っている	-	15.1	15.5	13.2	15.9	15.1	-	20.8	20.0	21.9	21.0	21.9
とくに結婚は考えていない	-	7.7	7.3	8.7	8.1	7.4	-	10.4	11.2	10.4	10.2	8.5
友人として交際している異性がある	23.6	19.2	15.3	11.3	14.0	9.4	25.4	19.5	15.9	12.4	12.9	11.9
結婚したいと思っている	-	2.3	2.2	1.6	1.8	1.5	-	2.2	2.4	2.1	1.6	2.0
とくに結婚は考えていない	-	16.4	12.6	9.1	11.9	7.6	-	16.6	12.9	9.9	11.3	9.6
交際している異性はいない	48.6	47.3	49.8	52.8	52.2	61.4	39.5	38.9	41.9	40.3	44.7	49.5
交際を望んでいる	-	-	-	-	-	32.6	-	-	-	-	-	25.7
とくに異性ととの交際を望んでいない	-	-	-	-	-	27.6	-	-	-	-	-	22.6
不詳	5.5	7.2	8.7	10.9	6.6	4.6	4.3	6.3	6.8	10.2	5.7	4.6
(再掲)結婚したい交際相手あり	-	20.6	20.6	17.5	20.5	18.4	-	26.8	26.2	27.9	27.3	27.0
総数(18~34歳)	100.0%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
(集計客体数)	(3,299)	(4,215)	(3,982)	(3,897)	(3,139)	(3,667)	(2,605)	(3,647)	(3,612)	(3,494)	(3,064)	(3,406)

注：対象は18歳～34歳未婚者。「結婚したい交際相手」には婚約者を含む。
設問「あなたには現在、交際している異性がありますか。」交際している異性がある場合「最も親しい」交際相手との結婚の希望、交際している異性がない場合「異性ととの交際の希望」。

出所) 国立社会保障・人口問題研究所編集 (2014) 表3-1引用。

表5 調査・年齢別に見た、交際相手をもたない未婚者の交流の希望

年 齢	総数(集計客体数)	交際している異性はいない			
		交際を望んでいる	とくに異性ととの交際を望んでいない	不詳	
【男 性】	18～19歳	100.0% (304)	45.7%	49.7	4.6
	20～24歳	100.0 (841)	52.8	45.4	1.8
	25～29歳	100.0 (602)	54.8	43.7	1.5
	30～34歳	100.0 (505)	55.8	42.6	1.6
	総数(18～34歳)	100.0 (2,252)	53.1	44.9	2.0
	参考(35～39歳)	100.0 (412)	52.7	45.9	1.5
【女 性】	18～19歳	100.0% (317)	42.0%	55.2	2.8
	20～24歳	100.0 (650)	49.7	48.0	2.3
	25～29歳	100.0 (392)	58.9	39.3	1.8
	30～34歳	100.0 (326)	57.7	39.9	2.5
	総数(18～34歳)	100.0 (1,685)	51.9	45.8	2.3
	参考(35～39歳)	100.0 (291)	51.5	45.7	2.7

出所) 国立社会保障・人口問題研究所編集 (2014) 表3-6引用。

「交際している異性がない者」のうちで「未婚者で交際を望んでいる者」の割合は、男性(25～29歳を除く)では、年齢層が上がるにつれて増加している(表5)。女性についても同様である。そして「交際を望んでいない」割合よりやや多い。同内容の質問を調査ごとに示したのが参考図表9である。

未婚者が交際を望んでいる者の割合が上昇しているにも関わらず、結婚率は上昇していない。結婚率が上昇していない理由はどこにあるのだろうか。その元になっている原因を考えてみる必要がある。

1-2 交際のきっかけ

(1) 出会いのきっかけ調査結果

交際のきっかけはどのような場面からもたらされるのだろうか。国立社会保障・人口問題研究所編集（2014）の調査（年次別）結果によると、①「職場・仕事先で（20%台）」②「学校で（20～23%）」③「友人・兄弟姉妹を通じて（15～25%）」④「サークル・習いごとで（10%未満）」の順となっている（表6）。同様の内容を図で示したのが参考図表10である。人と人の交流機会が多い場の順ともとれる。コミュニケーションの機会が多い場ほど交際のきっかけも多いと言えそうである。（近年は③「友人・兄弟姉妹を通じて《15～25%》」も微増の傾向があるが）。

(2) 自分に出会いがないと思う理由

逆に、交際のきっかけ、出会いのきっかけがないと思う理由を見てみる。

国立社会保障・人口問題研究所編集（2014）等によると、交際相手がない理由として、「適当な相手に巡り合わない」（男・女25～34歳）が筆頭に挙げられている。また、「異性とうまく付き合えない」（男・女25～34歳）も、11～14%と無視できるものではない。

さらに、ホームページ（「婚活のみかた」）上の調査結果から見ると、

表6 調査別に見た、交際相手と出会ったきっかけの構成

	調査 (調査年次)	総数(客体数)	学校で	職場や 仕事で	幼なじみ ・隣人	サークルや 習いごと で	友人・兄弟 姉妹を通 じて	見合いで	結婚相談 所で	街なかや 旅先で	アルバイト で	その他	不詳
【男 性】	第9回調査 (1987年)	100.0 % (1,514)	21.9 %	29.7	2.5	9.9	16.1	1.4	0.1	8.9	-	1.8	7.7
	第10回調査 (1992年)	100.0 (1,918)	22.9	26.6	2.2	9.0	16.9	1.3	0.2	5.8	7.9	1.8	5.3
	第11回調査 (1997年)	100.0 (1,651)	22.1	23.0	2.8	9.2	21.4	1.0	0.2	7.7	5.8	2.7	4.1
	第12回調査 (2002年)	100.0 (1,417)	20.5	22.7	2.3	7.1	21.9	0.6	0.0	5.6	7.9	5.2	6.2
	第13回調査 (2005年)	100.0 (1,292)	18.7	24.5	2.2	8.0	22.5	0.5	0.2	4.6	6.7	4.3	7.7
	第14回調査 (2010年)	100.0 (1,246)	22.3	21.7	2.8	6.8	23.9	0.5	0.3	4.9	4.7	4.5	7.5
	第9回調査 (1987年)	100.0 % (1,465)	21.3 %	30.7	2.2	9.1	19.8	2.2	0.1	6.9	-	1.6	6.1
【女 性】	第10回調査 (1992年)	100.0 (2,002)	19.6	29.6	2.4	8.4	18.9	1.4	0.1	5.0	8.4	2.5	3.6
	第11回調査 (1997年)	100.0 (1,854)	21.0	28.6	1.9	7.8	20.2	1.1	0.2	6.5	7.3	2.1	3.2
	第12回調査 (2002年)	100.0 (1,729)	17.0	25.2	1.3	7.1	26.0	1.0	0.2	4.9	8.7	5.0	3.7
	第13回調査 (2005年)	100.0 (1,519)	20.9	24.2	2.6	6.1	24.0	0.5	0.1	5.0	6.4	4.9	5.4
	第14回調査 (2010年)	100.0 (1,564)	21.4	23.2	1.8	7.5	23.3	0.6	0.4	3.5	5.6	4.6	8.1

出所) 国立社会保障・人口問題研究所編集（2014）表3-7引用。

<女性の回答>

- ・ 1位 会社と家の往復ばかりだから・・・62%
- ・ 2位 恋人を見つけようとしていないから・・・29%
- ・ 3位 人見知りをするから・・・26%
- ・ 4位 異性が少ない職場に勤めているから・・・18%
- ・ 5位 異性と接するのが苦手だから・・・15%
- ・ 毎日、遅い時間に車で帰宅……。誰とも会いません
- ・ いろいろと出掛けているみんなの話を聞くと、私はこれで大丈夫なのかと思う
- ・ 一秒でも早く家に帰りたいと思う時、だから出会いがないんだと実感する
- ・ 初対面の人には、自分から話しかけられない
- ・ ここぞというときに声がかけれない
- ・ 異性どころか同世代もほとんどいない職場に勤めている
- ・ どのように異性と接したら良いのか分からない
- ・ 飲み会でも同性とばかり話してしまう

となっている。

これらをまとめると、

a) 「会社と家の往復」(1位)、「異性が少ない職場」(4位)、「誰とも会いません」「異性どころか同世代もほとんどいない職場に勤めている」と物理的・構造的に異性には出会えない環境で就業、生活している場合と、

b1, b2) 「恋人を見つけようとしない」(2位)、「人見知りをする」(3位)、「異性と接するのが苦手」(5位)、「初対面の人には、自分から話しかけられない」「ここぞというときに声がかけれない」「どのように異性と接したら良いのか分からない」「飲み会でも同性とばかり話してしまう」といった、コミュニケーション力によって左右されているケースとに二分されることに気付く。

(3) 現代の若者が出会いのきっかけをつかめない理由

交際のきっかけは、①「職場・仕事先で」②「学校で」③「友人・兄弟姉妹を通じて」の順でつかめる傾向にあった。しかし、これらの中には、異性には出会えない物理的・構造的環境で生活しているケース(a)がある一方で、(b1, b2に属し)会話そのものが「恋人を見つけようとしない」(2位)「飲み会でも同性

とばかり話してしまう」ケース (b1) と、「人見知りをする」(3位)、「異性と接するのが苦手」(5位)、「初対面の人には、自分から話しかけられない」「ここぞというときに声がかげられない」「どのように異性と接したら良いのか分からない」といったコミュニケーション力にかかわるケース (b2) があると言える。

2. 出会い・交際に係わるコミュニケーションの考察

ここでは、結婚は、未婚者個々人が努力すれば可能なのだろうか、という点から考察する。

上記「1, 1-2. (3) 現代の若者が出会いのきっかけをつかめない理由」の分析結果より、(a) (b1) (b2) の3つのうち、(b2) の出会いのきっかけをコミュニケーション力に絞って考察する。

2-1 コミュニケーション力と交際

日本コミュニケーション能力認定協会によると、婚活等異性との交際を持つためにはコミュニケーション能力の上達が重要だという。

「世の中には、婚活をしなくては、結婚ができない人がいます。男性について考えると、コミュニケーション能力、会話の技術が重要である。結婚ができない人の中で、結婚相談所を訪れる多くの男性にはコミュニケーションに難ありの人が多い。最近ではコミュ障という言葉が出始めているくらいコミュニケーションが取れなくて悩んでいる人がいます。こういう人たちは、結婚ができないことが多い。これと反対の例として、顔がよくない芸人さんでも、異常にモテる人を考えると、話術のなせるワザがモテることに寄与していると考えられることができる」という。

「近年では、他人(親族、きょうだい等からの見合い、友人からの紹介)からではなく、結婚は自分の意志で相手を探すものだと考えられている。その場合、コミュニケーション力が必須となる。自分から動いて、お相手探しをする、そういう時代に入ってきている。今は黙っていたら、結婚が遅れるという結果になる

だけだ。(そういう人は)いつまでも独身ということにもなりかねない」(ホームページ：日本コミュニケーション能力認定協会)。

【はっきりとした意図と目的を持つこと】

良いコミュニケーションをするためには、はっきりとした意図と目的を持たなければならない。コミュニケーションというのは、その相手とどうなりたいのか、どうなることが自分にとって一番良い形なのを考え、その形を実現していこうというはっきりとした意図と目的をもって使われていくものである。意図と目的「いろいろな人とかかわりながら仕事や自分の生活をより充実させたい」「いろいろな意見や情報を得るための手段にしたい」といったことがコミュニケーションの意図であり目的である(浮世, 2011)。

2-2 コミュニケーションのタイプとその形成期

【コミュニケーションの3つのタイプ】

浮世(2011)によると、コミュニケーションの基本には、3つの力、すなわち a. 聴く力、b. 表現する力、c. かかわる力がある。a. タイプの場合には、相手のいうことを理解してから行動するため、最初の印象はとっつきにくいが付き合うにつれて誠実な姿勢が伝わり相手の信頼性も上がってくる。b. タイプの場合には、自分を先に出しながら、それによって相手との関係性をつくっていくタイプなので、短期間で人との関係性をつくり上げることができる。c. タイプは、自己表現する方でも、一方的に話を聴く訳でもなくバランスよく相手との雰囲気をつくり出していくことができるタイプだという。

コミュニケーションの技術を磨き上げていくためには、自分はどこが得意でどこが不得意かを知っておくことが必要である。

【自分のコミュニケーションタイプはいつつくられるのか】

それぞれの人がそれぞれ得意な分野を持っている。では、得意な分野がいつつくられるのだろうか。だいたい子供のころ、家族の中で自分のコミュニケーションパターンを作っていく。家族を離れ、小学、中学、高校と進学するにつれて性格が表面化してくる。社会人になるにつれていつしか自分の得意分野に出会うことがある。その背景には過去にその人がその得意なコミュニケーションパターンで得をしてきたという事実があるという。

2-3 コミュニケーション力による交際・結婚への影響

以上のコミュニケーション力アップが、どのように、交際や結婚に結びついていくのだろうか。

会話・コミュニケーション能力を挙げることによって、

- 今まで異性とはほとんど話をしたことはなかったが、話をすることができるようになることは可能なのだろうか。
- これまでも会話はあったが会話する人の中には相手として認識できなかったケースの場合、コミュニケーション能力をつけることにより、交際相手としてふさわしい存在を身近に発見できる可能性は出てくるのだろうか。

日本コミュニケーション能力認定協会によると、コミュニケーションスキルは、決して生まれもった才能や資質のみに依存するのではない。方法論やスキルを学ぶことができれば、誰でも後天的に身につけることが可能です。こうした問題を抱えているなら、その原因は、相手の枠組みに寄り添った多角的な視点をもっていないからに他ならない、という。

以下、コミュニケーションスキルの例を挙げる。

カウンセリングによるアドバイスや上達のためのコミュニケーション技術としてしっかりと相手とかかわる姿勢を示す。例えばしっかりと相手を見る。座るときはゆったりと座る、また相手の口調に合わせて話す。相手の口調がゆっくりならこちらもゆっくりと話すなどが挙げられる。また会話の中で、うなずきができるかどうかは大きな差を生むことになる。さらに、「なるほど」「へーそうなんですか」「へえ」といった相づちは好感度を上げることができるという（浮世、2011）。

【コミュニケーションのベースとなる人とのやり取り、交流（＝ストローク）】

ストロークが多くの色で彩られている人ほど豊かで広がりのあるコミュニケーションをとる事ができる。

反対に相手の人に「ちょっと聞いてほしい」と素直に言えず、「ああこの人は私の話を聞かないのだ。私は否定されているのだ」とかってに解釈してはいけなく、相手にきちんとストロークを出さなければならない。正しく素直に相手にストロークを要求すべきです。その方が健全なコミュニケーションをとることができる。相手との人間関係も良好になる。

ストロークには、表情、しぐさ、声、言葉、態度など限りなくある。その中にはプラスのストロークとマイナスのストロークがある。プラスのストロークを、受け取った相手は心地よく感じ、自分が肯定されているという感情を持つことができる。反対にマイナスのストロークを受け取った相手は不愉快な気持ちになる。

子供のころ「ダメな子だ」「本当にグズだ」などマイナスのストロークばかりを投げつけられて育った子はおのずとマイナスのストロークを多く覚えそれを使うようになる。従って、私たちは意識的にプラスのストロークを投げかける必要がある。意図的にプラスのストロークを使った交流はお互いの精神を安定させ、前向きな話題を作り出すカギとなる。

以上の考察からコミュニケーションのまずさ、不適切さが相手との意思疎通を悪くし、ひいては互いの関係を疎遠にしていることが理解できる。これを改善することによって出会えるチャンスを多くつくることができると言えよう。

3. 属性ごとのコミュニケーション不足の状況把握とそれへの対応

以上、出会いや交際にはコミュニケーションも深く関わっていること、コミュニケーションには形成期があり、いくつかのタイプに育っていくことを確認した。コミュニケーション力は最初に家庭の中で、次に小学校、中学校、高校・大学と組織・集団の中で培われる。そしていくつかのタイプに分かれてその人特有のパターンが出来上がるという。

従って以後では、属性(①.年齢、職種、収入、②.家族規模、兄弟姉妹、家族の意思等)ごとに、各個人のコミュニケーションタイプをある範囲の枠で把握できないかを模索する。その方法は、上記の知見をもとに、属性ごとにコミュニケーション力が異なることを利用し、交際のきっかけをつくれる、あるいはつけれないと結果も違ってくるという仮説を立てる。そして、その仮説のアンケートを訊いてみるというアンケート調査を実施してコミュニケーションタイプを知ることが可能となる。調査結果のデータをもとに各属性内では、個人的には何が不足しているのかを把握することによってコミュニケーション能力をアップさせる方

法を得ることができる。

3-1 属性ごとのコミュニケーション不足の状況把握

ここではその人が持つ属性 (①.年齢、職種、収入、②.家族規模、兄弟姉妹、家族の意思等) ごとにコミュニケーションの不足要因を探し出す。

3-2 コミュニケーション不足への対応

コミュニケーション力について以下に挙げる項目、すなわち、子育ての中で、家庭内では、1) ①何歳ぐらいから発達するのか、2) ②家族規模の類型ごとに、その影響はあるのかどうか、あるとするなら、例えば家族人数によってどのように分けられるのか。

家庭外で、3) ③小、中、高等学校での違いがあるのか、④小、中、高等学校での科目の違い (特にホームルーム有無)、4) 言葉の使い分けで、⑤プラスの言葉 (相手に好印象を与える言葉) を多く使う習慣か、マイナスの言葉 (相手に悪印象を与える言葉) を多く使う習慣か、5) ⑥両親の帰宅時間の違い、⑦職場での男女比、⑧出会い・交換に結び付くのは、同業者同士か異業者同士間か、⑨就業中の昼休み時間の長さ、⑩休憩時間取得の有無、⑪終業時刻、⑫残業 (サービス残業含む) の有無、についてコミュニケーション力の違いを研究する。

①から⑫によって形成されたコミュニケーション力の差、あるいはパターンを導き出し、差・パターンごとの改善策 (取り組み方法) を検討する。

改善案として、上記の1) は青年期までの発達過程、3) 小、中、高等学校でのコミュニケーション、教科 (ホームルームの有無等) に関する教育方針の再検討、5) は男女とアンバランスな場合の対応、コミュニケーションを増やすための就業の在り方の研究、2) 4) については、家族規模・きょうだい・コミュニケーション能力不足の種類に応じた、コミュニケーション教育内容ならびに、必要に応じて a. コミュニケーション講座の他、(異性と交流可能な) b. バレーボール、c. テニス、d. ゴルフ、e. バトミントン、f. ダンス、g. スイミング、h. サーフイン、i. 園芸、j. 登山、k. 撮影クラブ、l. 楽器演奏、m. 陶芸等スポーツや趣味の提供によって改善できることを仮定として立てる。

結 論

これまでの結婚前のライフ・ステージにおける少子化研究は、結婚とモノの関係に着眼点を置いたが、本研究は人（男）と人（女）の関係（コミュニケーション）に注目した。すなわち、出会いや交際のきっかけは、コミュニケーション力とどう関係しているのか、さらにコミュニケーション力のアップは、属性（年齢、職種、収入、家族規模、兄弟姉妹の別等）ごとにどう対策を立てることができるのかにスポットライトを当てた。

結婚前の学術的な最新の研究は、結婚とその属性から未婚・結婚の原因を探ろうとしたもの（永井, 2016、永井・久木, 2016、中西, 2016、原田, 2016）である。この場合の属性は、配偶状態別、性別、年齢別、有業・無業、正規・非正規社員別、持ち家率、家計収支（住居費、消費支出、入貯蓄高、負債保有率、住宅・土地のための負債保有率や現在高）などを挙げている。

しかし、結婚率との関係を考察する場合、就業、収入、持ち家率も大きな要因ではあるが、これらの要因内容を充実させることが、直接的に結婚率を上げることになるとは思えない。

本研究は、男女が出会うきっかけとその後の交際は、コミュニケーション能力を高めることによって結婚率は増加すると仮定し、それを属性ごとに上昇させるにはどうすべきかについてのものである。

コミュニケーション能力に関して、交際のきっかけをもたらすものは、人と人の交流機会が多い場の順ともとれた。コミュニケーションの機会が多い場ほど交際のきっかけも多いようであった。結婚仲介業者は、コミュニケーション能力、会話の技術が重要であるという。

本稿では、その人が持つ属性（①.年齢、職種、収入、②.家族規模、兄弟姉妹、家族の意思等）ごとにコミュニケーションの不足要因を探し出す計画を立てた。すなわち、子育ての中で、家庭内では、1)①何歳ぐらいから発達するのか、2)②家族規模の類型ごとに、その影響はあるのかどうか、あるとするなら、例えば家族人数によってどのように分けられるのか。

家庭外で、3)③小、中、高等学校での違いがあるのか、④小、中、高等学校

での科目の違い（特にホームルーム有無）、4）言葉の使い分けで、⑤プラスの言葉（相手に好印象を与える言葉）を多く使う習慣か、マイナスの言葉（相手に悪印象を与える言葉）を多く使う習慣か、5）⑥両親の帰宅時間の違い、⑦職場での男女比、⑧出会い・交換に結び付くのは、同業者同士か異業者同士間か、⑨就業中の昼休み時間の長さ、⑩休憩時間取得の有無、⑪終業時刻、⑫残業（サービス残業含む）の有無、についてコミュニケーション力の違いを研究すべき計画をもった。以後の研究では属性ごとに、コミュニケーション力の発達の様子を研究していくこととする。

【参考文献】

- ・浮世満里子（2011）「プロコンセラーのコミュニケーションが上手になる技術」あさ出版, 1-146頁.
- ・国立社会保障・人口問題研究所編集（2014）『平成22年わが国独身層の結婚観と家族観—第14回出生動向基本調査—』一般財団法人 厚生労働統計協会, 15-73頁.
- ・国立社会保障・人口問題研究所編集（2007）『平成17年わが国夫婦の結婚過程と出生力』—第13回出生動向基本調査—』一般財団法人 厚生労働統計協会, 1-41頁.
- ・財団法人 家計経済研究所（2005）『若年世代の現在と未来』国立印刷所, 14-32頁.
- ・佐藤晴彦（2012）『子供を持つために何が必要か、そして求められている支援とは？』アートヴィレッジ, 9-29, 81-120頁.
- ・佐藤晴彦（2013）「出産意図の分類化による政府支援の検証」『計画行政』36巻2号, 76-82頁.
- ・佐藤晴彦（2014）「出産意図の観点から見た母親の不安・ストレスが出生に与える影響」『明海大学教養論文集』明海大学 No.25, 27-38頁.
- ・佐藤晴彦（2016）「出産率回復に向けた政府施策の検証」『経済学論纂』中央大学経済学部, 103-119頁.
- ・谷益美・枝川義邦（2015）『タイプが分かればうまくいく！コミュニケーションスキル』1-186頁.
- ・内閣府（2012）『子ども・子育て白書』勝美印刷株式会社, 35-73頁.
- ・内閣府（2013）『少子化社会対策白書』勝美印刷株式会社, 8-24頁.
- ・内閣府（2014）『少子化社会対策白書』勝美印刷株式会社, 3-34頁.
- ・内閣府（2015）『少子化社会対策白書』日経印刷株式会社, 3-36頁.
- ・内閣府（2016）『少子化社会対策白書』日経印刷株式会社, 1-18, 70-80, 97-103頁.
- ・永井暁子（2016）「現代日本における未婚者の特性と経済生活」季刊家計経済研究 Spring, No.110, 8-23頁.
- ・永井暁子・久木元真吾（2016）「未婚者の生活と意識に関する調査の概要」季刊家計経済研究 Spring, No.110, 2-7頁.

- ・長島清敬 (2012) 『コミュニケーションスキル—対人関係改善の処方箋』 同友社, 1-139頁.
- ・中西泰子 (2016) 「独身者の親子関係とその経済的背景」季刊家計経済研究 Spring, No. 110, 25-32頁.
- ・原田謙 (2016) 「未婚者のソーシャル・ネットワークと健康」季刊家計経済研究 Spring, No.110, 43-52頁.

<ホームページ>

- ・厚生科学研究 (1997) 「少子化社会における家族などの在り方に関する研究」.
<http://www.8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2005/17.pdfgaiyoh/pdf/hg150000.pdf>
- ・婚活のみかた日本コミュニケーション能力認定協会
<http://konkatsu-no-mikata.com/column/20-40/030812400>
- ・理想の彼女と出会いたい・理想の結婚がしたい
<http://www.life-consulting.co.jp/column/880/>
- ・恋愛関係の統計データから読み解く社会問題
<http://int.search.tb.ask.com/search/GGmain.jhtml?p2=^UX^xdm554^LAJAJP^jp&si=CM68rOrl>
- ・恋愛コミュニケーション力向上と少子化対策
<http://www.life-consulting.co.jp/column/1149/>

【注】

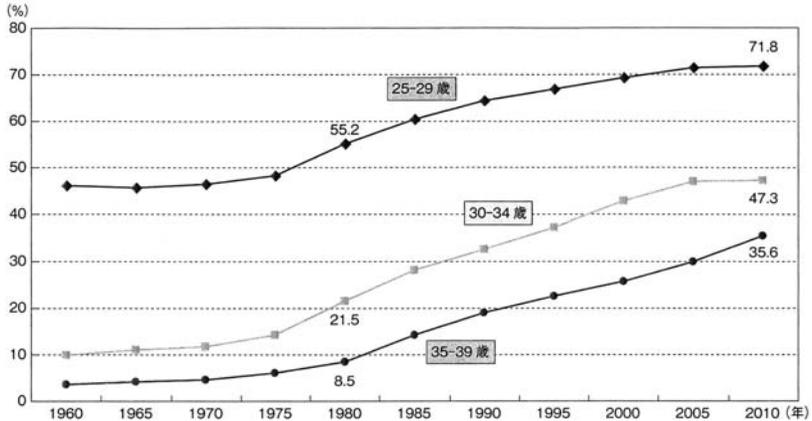
- 1) 合計特殊出生率 (合計特殊出生率は「15～49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもの」で、一人の女性が一生の間に生む子どもの数を推計したもの) を見ると第1次ベビーブーム期には4.3を超えていたが、1950年以降、急激に低下し、その後、第2次ベビーブーム期には2.1を超えていたが、1975年以降2.0を下回ってからは、再び低下傾向を示した。そのうち1989年(丙午)、2005年は、その低下傾向の中でそれまでの最低(1.57、1.26)を示す記録的な年であった。ここ十数年はやや上昇し2014年には1.42を示した(内閣府、2016第1-1-1図)。
- 2) 高齢化も進展している。
- 3) 夫婦の完結出生児数で表される。これは結婚持続期間が15～19年の夫婦の平均出生児数を表し。1972～2002年までほぼ横ばい(2.20～2.23)である。(近年はやや下がり気味2005年2.09、2010年1.96)。(内閣府、2016)。
- 4) 出産意図に関わる要因について現実的には不十分で子どもをもつ気にはなれないが(例えば部屋の数・住居のスペース)、代替的要因によって仮定的に叶うことがあれば(保育園の受入れ可等)、出産意図をもてるかどうか、という分析では、9要因中7要因が出産意図との有意な関係性を示した。しかし、結婚することの価値観、ならびに夫婦間における価値観、子供を持つことの意味・価値観を構築し、心理的な負担軽減・肉体的負担の軽減に通じる教育を施していく必要があることを報告した(佐藤、2013)。
- 5) また、出産や子育てを初めて経験した時、不安・ストレスは大きい。年月が経つにつれて、また子供数が増えるにつれて、不安・ストレスは少しずつ治まっていく。しかし、30代後半以降、年齢や肉体的負担、自分の生き方が制約されること、家族に対するいくつかの責任を持たなければならなくなること等が加わり、不安・ストレスは重く押し掛

かることを報告した（佐藤, 2014）。

- 6) 出産意図は、各夫婦の生活上、自然に必要となる8要因から生じると考えた。
- 7) P16、国立社会保障・人口問題研究所編集, 2014

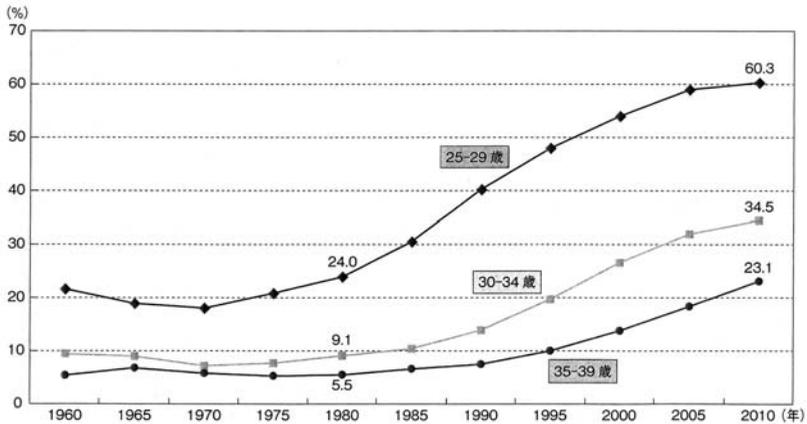
【参考図表】

参考図表 1 年齢別未婚率の推移（男性）



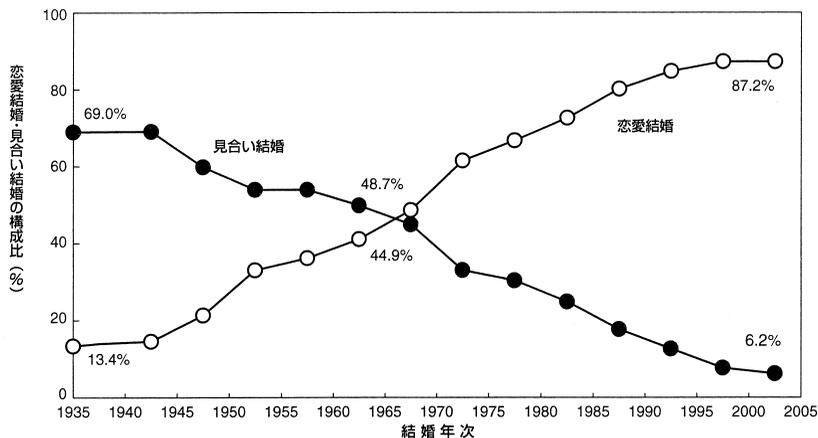
資料：厚生労働省「人口動態統計」内閣府（2016）第1-1-5図引用。

参考図表 2 年齢別未婚率の推移（女性）



資料：厚生労働省「人口動態統計」内閣府（2016）第1-1-6図引用。

参考図表3 恋愛結婚・見合い結婚比率の推移



注：対象は表1-6と同じ。

出所)『平成17年わが国夫婦の結婚過程と出生力 第13回出生動向基本調査』

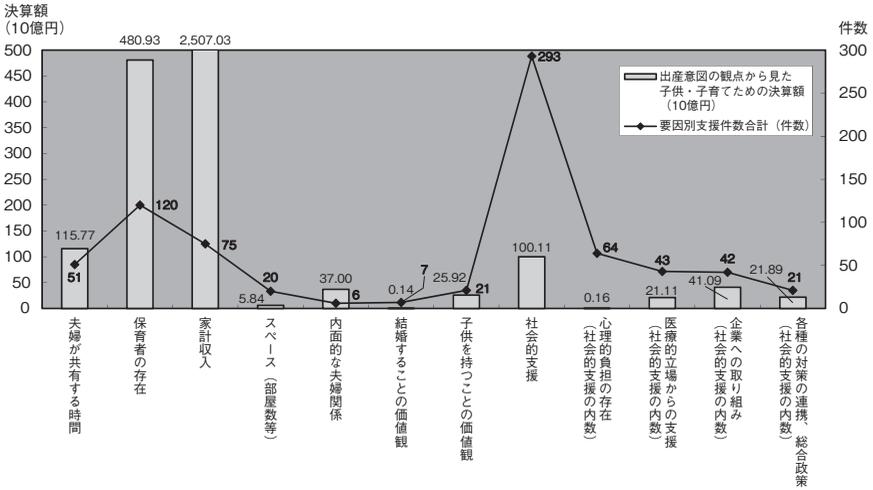
図1-3引用。

参考図表4 出産数・出産意図にかかわる主要因とその例

項目	例
a) 夫婦が共有する時間	労働時間等
b) 保育人の存在	両親、協力可能な祖父母、保育士等
c) 家計収入	家計収入、(マイナスの収入の要因として) 養育費・教育費・住宅ローン等
d) スペース (部屋数等)	部屋、保育園、幼稚園等
e) 内面的な夫婦関係	夫婦関係、家庭を築く大切さ
f) 結婚することの価値観	結婚することの価値観
g) 子どもを持つことの価値観	子どもを持つことの価値観、子どもを持つことの価値観の変化
h) 心理的負担の存在	心理的負担、育児ストレスや不安
i) 社会的支援	医療、福祉、民間、地方公共団体、国

参考図表 5

出産意図支援の観点から見た施策件数と決算額^{注)}



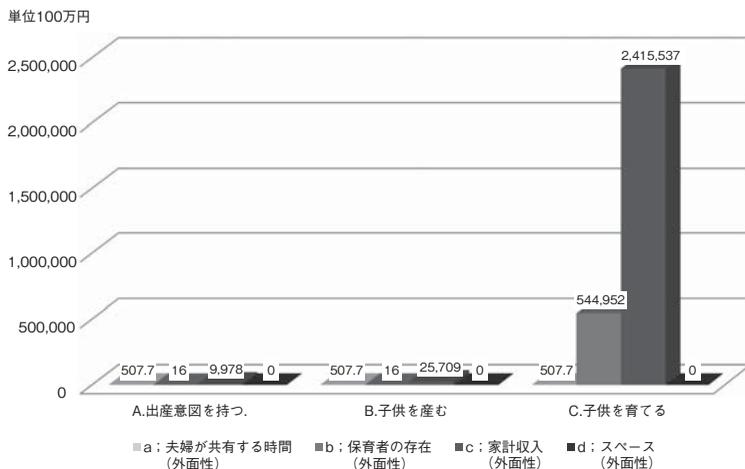
出産意図に関わる要因

出所) 内閣府 (2012) 「参考」をもとに作成

注) 22年度決算額をもとに、本研究の趣旨に沿って計算した値を表記

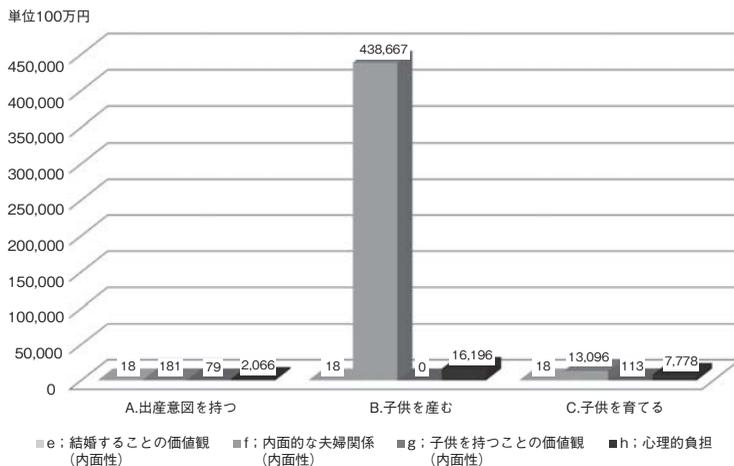
参考図表6 (1)

3 ライフステージから見た政府施策予算 — 出産意図分類 (4 外面性) 別—



参考図表6 (2)

3 ライフステージから見た政府施策予算 — 出産意図分類 (4 内面性) 別—



参考図表7 「一生結婚するつもりはない」と回答した未婚者の割合

年 齢	【男 性】							【女 性】						
	第8回調査 (1982年)	第9回調査 (1987年)	第10回 (1992年)	第11回 (1997年)	第12回 (2002年)	第13回 (2006年)	第14回 (2010年)	第8回調査 (1982年)	第9回調査 (1987年)	第10回 (1992年)	第11回 (1997年)	第12回 (2002年)	第13回 (2006年)	第14回 (2010年)
18～19歳	1.8%	5.7	6.2	7.2	5.0	5.2	9.4	2.6%	4.7	5.5	6.1	6.1	7.2	7.9
20～24歳	1.2	3.6	4.5	5.5	4.7	6.8	8.7	1.9	2.8	3.9	4.1	3.9	4.5	5.4
25～29歳	2.9	3.6	3.2	5.5	5.3	6.9	7.7	4.0	5.6	5.5	5.4	4.2	4.1	6.5
30～34歳	5.1	8.3	7.5	9.6	7.3	9.0	12.9	23.6	16.9	12.6	5.5	8.5	9.2	9.3
35～39歳	—	—	—	—	—	—	16.5	—	—	—	—	—	—	16.9
40～44歳	—	—	25.4	18.5	15.1	17.0	20.5	—	—	49.2	33.3	28.7	29.2	31.5
45～49歳	—	—	44.4	32.0	23.9	34.3	30.6	—	—	60.8	46.6	37.1	41.7	45.1
総数(18～34歳)	2.3%	4.5	4.9	6.3	5.4	7.1	9.4	4.1%	4.6	5.2	4.9	5.0	5.6	6.8
総数(18～49歳)	2.3%	4.5	7.0	8.3	7.0	9.4	12.5	4.1%	4.6	8.5	7.2	6.9	8.5	11.0

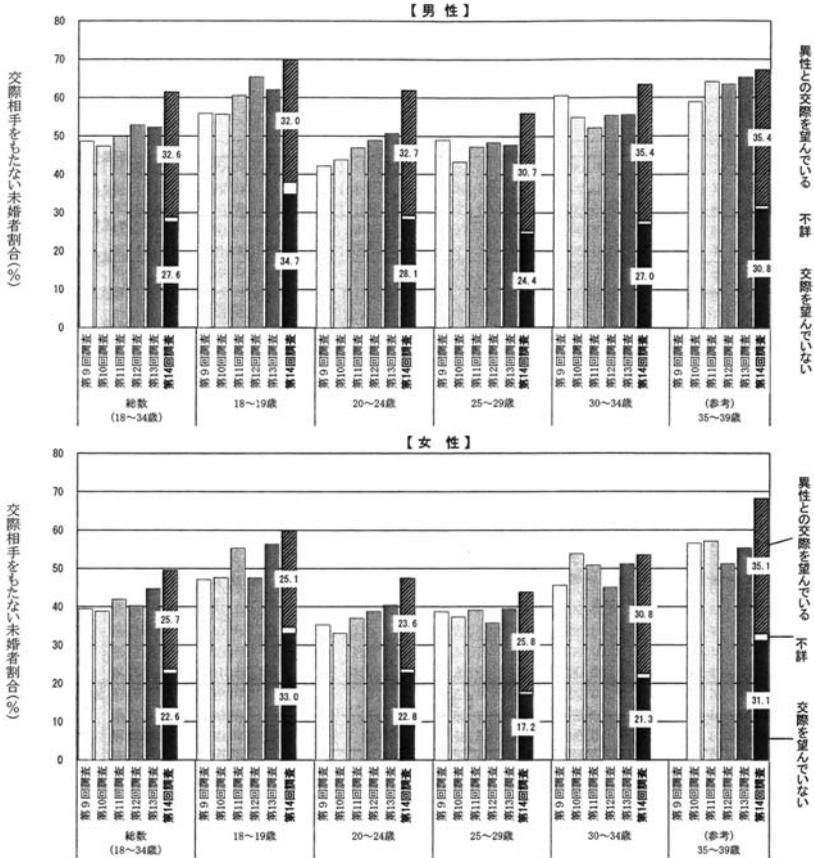
出所) 国立社会保障・人口問題研究所編集 (2014) 表1-3引用。

参考図表8 調査・年齢別にみた、結婚年齢重視/理想の相手重視の構成

調査/年齢	【男 性】				【女 性】				
	総 数 (客体数)	ある年齢まで には結婚する	理想の相 手	不 詳	総 数 (客体数)	ある年齢まで には結婚する	理想の相 手	不 詳	
第9回調査 (1987年)	総 数(18～49歳)	100.0% (3,027)	60.4%	37.5	2.1	100.0% (2,420)	54.1%	44.5	1.3
	35歳未満小計	100.0 (3,027)	60.4	37.5	2.1	100.0 (2,420)	54.1	44.5	1.3
	18～19歳	100.0 (541)	57.9	39.9	2.2	100.0 (601)	56.9	42.1	1.0
	20～24歳	100.0 (1,355)	61.8	36.3	1.8	100.0 (1,271)	57.5	41.5	1.0
	25～29歳	100.0 (785)	63.1	34.5	2.4	100.0 (427)	47.3	50.6	2.1
	30～34歳	100.0 (346)	52.3	45.4	2.3	100.0 (121)	28.9	67.8	3.3
第10回調査 (1992年)	総 数(18～49歳)	100.0 (4,248)	51.4	46.7	1.9	100.0 (3,454)	47.6	50.8	1.6
	35歳未満小計	100.0 (3,795)	52.8	45.5	1.6	100.0 (3,291)	49.2	49.6	1.3
	18～19歳	100.0 (739)	49.9	48.7	1.4	100.0 (780)	55.0	44.0	1.0
	20～24歳	100.0 (1,673)	55.2	43.4	1.4	100.0 (1,640)	51.2	47.4	1.4
	25～29歳	100.0 (953)	53.3	44.8	1.9	100.0 (664)	44.3	54.5	1.2
	30～34歳	100.0 (430)	47.7	50.0	2.3	100.0 (207)	26.6	72.0	1.4
第11回調査 (1997年)	総 数(18～49歳)	100.0 (3,902)	46.5	51.8	1.7	100.0 (3,402)	41.4	57.5	1.2
	35歳未満小計	100.0 (3,420)	48.6	50.1	1.3	100.0 (3,218)	42.9	56.1	1.1
	18～19歳	100.0 (531)	47.6	51.2	1.1	100.0 (531)	44.3	54.8	0.9
	20～24歳	100.0 (1,460)	51.0	48.2	0.8	100.0 (1,591)	46.9	52.2	0.9
	25～29歳	100.0 (1,001)	49.7	48.9	1.5	100.0 (791)	40.6	58.2	1.3
	30～34歳	100.0 (428)	38.8	58.6	2.6	100.0 (305)	25.2	72.8	2.0
第12回調査 (2002年)	総 数(18～49歳)	100.0 (3,958)	46.4	52.0	1.6	100.0 (3,356)	41.4	57.2	1.5
	35歳未満小計	100.0 (3,389)	48.1	50.5	1.4	100.0 (3,085)	43.6	55.2	1.3
	18～19歳	100.0 (624)	47.6	50.5	1.9	100.0 (507)	50.5	47.9	1.6
	20～24歳	100.0 (1,240)	50.2	48.9	1.0	100.0 (1,267)	48.2	50.2	1.6
	25～29歳	100.0 (970)	48.6	50.1	1.3	100.0 (888)	42.2	57.2	0.6
	30～34歳	100.0 (555)	43.1	54.8	2.2	100.0 (423)	24.1	74.5	1.4
第13回調査 (2005年)	総 数(18～49歳)	100.0 (3,355)	49.1	49.4	1.5	100.0 (3,086)	46.5	52.0	1.5
	35歳未満小計	100.0 (2,732)	51.9	46.7	1.3	100.0 (2,759)	49.5	49.0	1.4
	18～19歳	100.0 (373)	52.3	46.1	1.6	100.0 (484)	50.6	48.1	1.2
	20～24歳	100.0 (890)	52.8	46.3	0.9	100.0 (1,086)	54.9	43.8	1.3
	25～29歳	100.0 (902)	54.9	43.6	1.6	100.0 (766)	50.4	47.9	1.7
	30～34歳	100.0 (558)	45.5	53.0	1.4	100.0 (423)	33.1	65.5	1.4
第14回調査 (2010年)	総 数(18～49歳)	100.0 (4,134)	53.0	45.9	1.1	100.0 (3,603)	53.6	44.9	1.4
	35歳未満小計	100.0 (3,164)	56.9	42.4	0.7	100.0 (3,044)	58.4	40.5	1.1
	18～19歳	100.0 (366)	54.6	44.5	0.8	100.0 (474)	59.5	39.9	0.6
	20～24歳	100.0 (1,196)	58.8	41.1	0.2	100.0 (1,253)	64.8	34.0	1.2
	25～29歳	100.0 (949)	58.4	40.1	1.5	100.0 (799)	57.1	42.2	0.8
	30～34歳	100.0 (653)	52.7	46.7	0.6	100.0 (518)	44.0	54.4	1.5

出所) 国立社会保障・人口問題研究所編集 (2014) 表1-4引用。

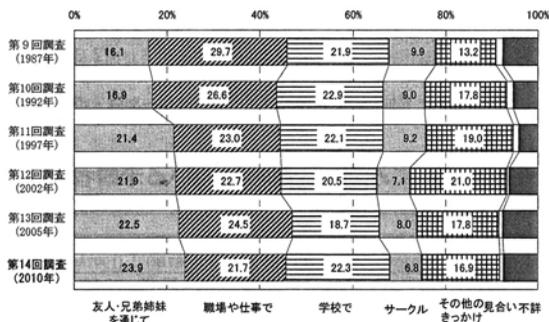
参考図表9 調査・年齢別にみた、交際相手をもたない未婚者の割合と交際の希望



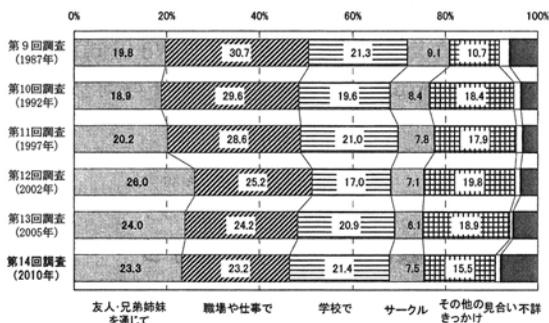
出所) 国立社会保障・人口問題研究所編集 (2014) 図3-4引用。

参考図表10 調査別にみた、交際相手と出会ったきっかけの構成

【 男性 】



【 女性 】



出所) 国立社会保障・人口問題研究所編集 (2014) 図3-5引用。